



萌芽期の早春施肥で1番草収量UP！

1番草は、1年間で確保できる牧草の概ね50%を占め、栄養価が高く、嗜好性が良いことから、いかに「量」をとるかが重要です。「量」を多くするには、牧草が萌芽したタイミングで施肥することがポイントです。

1番草の収量確保には「萌芽期」の施肥がベスト

1番草の収量を増加させるためには、有穂茎の発生を多くすることが重要です。牧草の「萌芽期」に施肥すると有穂茎が多くなり、1番草の収量が最大になります。

牧草の「萌芽期」とは、日平均気温5℃に達する頃であり、圃場全体の40～50%が緑化する頃のことをいいます。



図1「萌芽期」の草地
(八幡平市R7年3月下旬)

牧草の「萌芽期」は3月中旬～3月下旬（奥州・一関地域）

それでは萌芽期はいつ頃なのか？ 気象データ(アメダス)を参照すると、表1に示す時期には萌芽期に到達すると推測されます。

ただし、江刺の例をあげると、**2026年2月**は直近5年間の日平均気温より**高温で推移**しているため、**萌芽期は早まる可能性**があります！**今年はより早く！施肥**することをおすすめします！

地域	萌芽期の目安
江刺	3/11～3/21
若柳	3/11～3/21
一関	3/10～3/21
千厩	3/11～3/16
大船渡	3/6～3/11

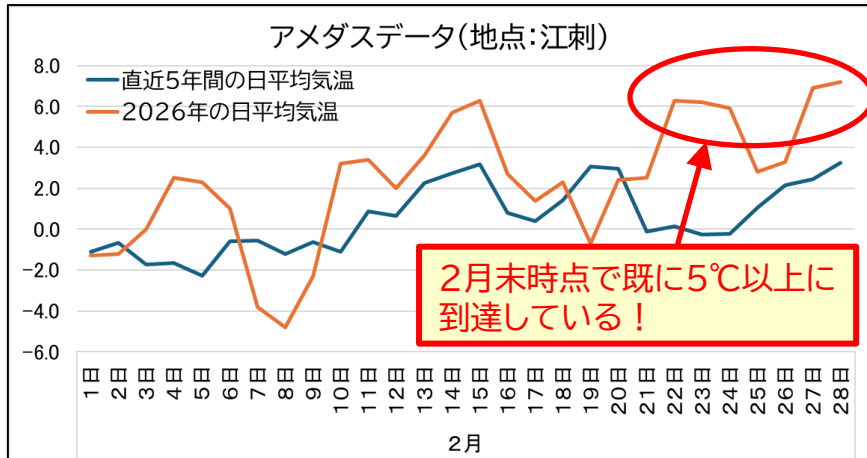


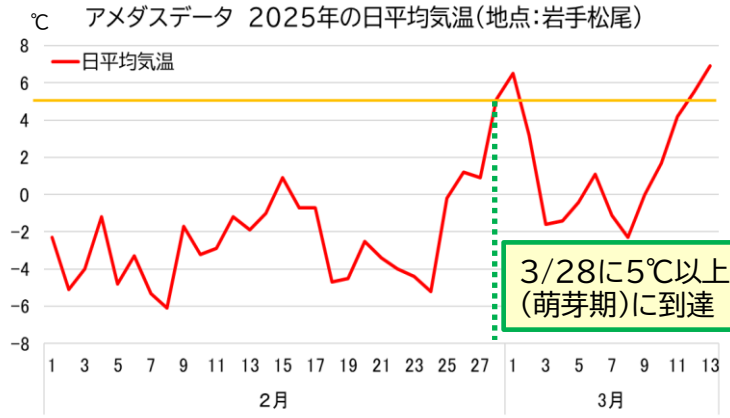
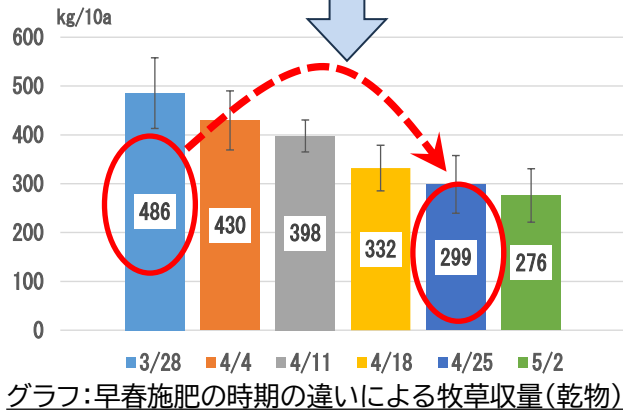
表:直近5年間の日平均気温から見た萌芽期の目安

グラフ:2月の日平均気温(江刺)

「萌芽期」施肥の効果実証試験（八幡平市での実証例）

昨年、八幡平市内のオーチャードグラス主体の草地で実施された実証試験では、**萌芽期に施肥した実証区の牧草収量(乾物収量)が486kg/10aと最も多く**、これより施肥時期が遅れるほど牧草収量が減少していくことが確認されました。

1か月の施肥の遅れが10a当たりロール1個の差(120cm直径、乾物60%程度)



【実証試験の内容】この実証試験は、早春施肥を3月28日(根雪消失直後)から1週間間隔で「草地化成211」を50kg/10a施肥し、出穂期に1番草の収量調査を実施した結果です。なお、圃場が乾燥しトラクターが圃場に入れた時期(3/28)から実証したものと。 ※全実証区ともに5/19が出穂期でした

留意点「焦りは禁物！」

早春施肥は圃場が乾燥し「トラクターが侵入しても草地を傷めない」状態であることを確認してから施肥を実施しましょう。



繁殖サイクルを回してガッチリ ~見えない儲けをわしづかみ!~

第10回は『維持期の栄養管理』と維持期(分娩前)にやるべきことについての内容でした。今回は、妊娠末期から授乳期にかけての栄養管理についてお伝えします。



第11回 妊娠末期～授乳期の管理(栄養管理)

1 分娩2か月前～授乳期は飼料を増給

繁殖牛は、分娩2か月前から授乳期は、胎子の発育や子牛への泌乳により維持期より必要な養分量が増加するため、増飼いが必要となります。

表 各ステージの飼料給与例

時期	配合飼料 (kg/日)	乾草 (kg/日)
維持期	0~1	6~8 (品質:並)
妊娠末期 (分娩2か月前~分娩)	1~2	6~8 (品質:良)
授乳期 (分娩後1か月)	2~3	8 (品質:良)

※ 配合飼料の成分値: CP 18%、TDN 72%
 ※ 繁殖牛飼養管理マニュアル(2026年版) 県南局版より

2 増飼いは重要!

(1) 栄養配分の優先順位(繁殖牛の場合)

- ①生命維持 ②胎子の発育 ③母牛の成長
 ④産乳 ⑤体脂肪蓄積 ⑥卵巣機能の回復

栄養不足は、真っ先に繁殖成績悪化につながり、子牛生産頭数の減少や、子牛販売収入の減少に陥ってしまいます。

(2) 子牛の胸腺の発達

胎子は分娩2か月前から急激に大きくなります。この時、免疫機能(白血球を生産)である胸腺も同時に発達するので、栄養が不足すると虚弱子牛が生まれる可能性が高くなります。

注意!

必要量以上に飼料を給与すると過肥になるので母牛の状態やBCSを観察しながら、少しずつ量を増やしましょう!